
パラパラ

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パラパラ

【Nコード】
N6482Y

【作者名】
脳好き人間

【あらすじ】
人類がみんな狂人になっちゃったよ。あーあ。

完全に趣味全開で書きます。肉体的にも精神的にも残酷な描写があるかもしれません。ごめんなさい。

俺は、普通だ（前書き）

人間皆狂ってくれれば、受験勉強しなくて済むのに。

俺は、普通だ

簡単に説明すると、人類がみんな狂った。何かの研究をやったような気がする俺の予測では、多分太陽からの磁気みたいなのが原因だったと思う。

幸い俺だけは狂っておらず、今朝は普通にコンビニで朝飯を買ううとしていたのだが、やっぱり店員が狂ってたから一悶着あった。

普通に飯を買おうとしただけなのに、俺を万引き犯扱いして、殴り掛かってきやがった。まあ、木刀で返り討ちにしてやったが。

全く、人間が他の動物達より優れているのは、脳のおかげだというのに、その脳が壊れているなんて、可哀相に。しかしあれだな、俺は木刀であいつを殴ったが、あいつの脳は壊れてるんだから、傷害罪にはならないだろう。脳の壊れた人間など、ただのタンパク質の塊だ。もしかしたら器物破損罪にはなるかもしれないが。

とにかく、早く家に帰ろう。そろそろ俺の脳コレクションの手入れをする時間だ。ああ、こんな欠陥製品ばかり見ていると目が腐りそう。早く脳を見て口直し、いや目直ししないと。

しかしまあ、本当に助かった。人間の脳が汚れる前に、脳コレクションを集めておいて。あと少し遅かったら永遠に完成製品を見ることが出来なくなるところだった。

しかししかししかしまあ、早過ぎてもやばかったんだが。警察に捕まってしまったかもしれないし。

ふはひひ、全く、丁度良いタイミングで異常が起こってくれたもんだ。おかげで刑務所行きにならずにすんだ。

とにかく、この異常者の楽園、『パラノイア・パラダイス』での生活を楽しむとしよう。脳と共に。

いや、待てよ、パラノイア、つまり偏執病は、異常者のことではなく、異常に偏った思考を持つ者のことだったような。

つまりこの名称は正確でない。いやしかし、俺はどうしても『パ

ラパラ』という略称で呼びたいんだ。
だからそう、つまり、細かいことは、気にしない、
だ。

復讐したい年頃なんです

許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない。あの木刀を持ち歩いている狂った男が、私の可愛いい妹を殺したんだ。私は見たんだ、あいつが笑いながら妹の頭を鋸で開けているところを。

すぐに警察に電話して、両親にも伝えようとしたけど、丁度その時に異変が起こってみんなおかしくなってしまった。

母は私の話を聞くと、「あらまあ、あの子もそういう年頃なのね、あんたは妹に構いすぎなのよ。しばらくあの子の自由にしてあげたら」とか言い出すし、犯人に復讐したいと父に伝えると、「ふん、お前もそんな年頃か。いいぞ、責任は父さんがとってやる。存分に暴れてこい。はははは」とか言われた。

仕方が無いから愛犬のポチに相談したんだけど、「わんつ、わん、わんわん」とか言われたし、やっぱ家族は当てにならないな、と思った。

これはもう自分でやるしかないな、と思い、おじいちゃんちに行って刀をもらってきた。流石にあの男も、刀で斬られれば死ぬだろう。おじいちゃんと同じように。

とにかくあいつは毎朝コンビニに朝食を買いに行ってるようだし、コンビニのまへの電柱で張り込むぞっ！あんパンと牛乳を買ったし、完璧だ！

そして朝、あいつがいつも通りコンビニに来た。いつも通り食べ物を手にとり、大分前にあいつが殺した店員の死体を木刀で殴ったあとに店から出た。

今がチャンスだ。後ろからザックリ斬ってやる。シミュレーションは沢山したし、ミスは絶対にしない。

よし、レッツ人斬り！

「天誅ーだーってうわっ！」

あいつまであと一歩ってところで、こけてしまった。足元を見ると、バナナの皮がおいてある。ま、まさか、そ、そんな、馬鹿な！

「おい、君、大丈夫かい？」

憎きあいつが、手を差し延べてきた。くそっ、私の妹を殺した分際で私に話しかけるとは許せない。

「お前っ、よくも私の妹を殺したなっ！斬り殺してやる！」

「はあ、俺が君の妹を殺した、だと？」

ふん、戸惑ってるな。自分が殺した人の家族にビビってるな。それか、この刀にビビってるのかな？

しばらくすると、男は木刀と私の顔を交互に眺め始めた。しまった、この状態じゃ、逆に殺されるかもっ。想定外だよ！

「……壊すには惜しい」

「はっ？」

何か呟いていたようだけど、慌てていたせいでよく聞こえなかった。なんて言っただろう？

「みんな狂ってしまったって、一応確認のために聞くけど、君は本当に妹がいたのか？」

「いたに決まってるじゃない！何意味わからないこと言ってるの！」

今度はハツタリか、なんて柔軟性にとんだ嫌がらせだ。

「なら聞くけど、君の妹の名前は？歳は？容姿は？思い出せるのか？」

「そんなの当たり前、じゃ、な、い？」

あれ、思い出せない。というか、私に妹なんていたのか？いたとしたら、思い出せないのはおかしい、よね？

「ふん、やはりそうか。君もまた、他の人と同じく狂ってたんだ」

「そ、そんな。私、狂って」

「ショックか、まあ、そうだろうな。でも、いいじゃないか」

「な、どうして？」

「君は今は正気を取り戻しただろ。狂ったの、心は正常に戻せるんだよ」

「そう、か。……あ、あの、ごめんなさい。さっきは勝手に思い込みで酷いこと言っちゃって」

思い出したら恥ずかしくなってきた。私はなんてことをしようとしていたのだろう。

「いや、いいんだよ。おかげで、君みたいな綺麗な人に出会えたんだから」

「えっ！綺麗って、私のことですか？」

な、なんなんだこの人は、初対面でいきなり綺麗とか言ってくるなんて。

「ここに他の人はいないだろ。っておい！足怪我してるじゃないか！大丈夫か？」

言われて足を見てみると、私の足に刀が刺さってた。多分、さつきこけたときに刺さったんだろう。

「大丈夫じゃ、ないです」

「そうか、救急車は当てにならないしな。そうだ、俺の家に医療道具があるんだが、どうする。家に来るんなら、治療してやるぞ。一応医者なんぞな」

普通なら初対面の男の人の家に行くなんて言語道断だけど、今は緊急事態だし、この人は私のこと綺麗とか言ってくれたし、行ってもいいよね。

私は男の人の提案に、小さく頷いた。

私は歩けないから、背負ってもらうことになった。かなり恥ずかしかったけど、不思議と幸せな気分になった。この人なら私を、そしてみんなを助けてくれそうな、そんな気がしたから。

「ふう。やっと運びきったか。しかし姉妹揃って騙されやすい性格だな。まあ、おかげで新鮮な脳を手に入れたんだから、俺としてはラッキーだが。それにしても綺麗だな、こいつの脳」

復讐したい年頃なんです（後書き）

書き終わって読み返してみると、自分の思考回路にドン引きしました。

くつろぎダイニング

ギコギコ、ギコギコ、今夜も隣の家から音がする。うるさいなあ、一体何を切断してるんだ？

人とか？ いやいやないない。流石に身近でそんな恐ろしいことが起こっているわけないもんな。

とにかく、テレビでも見て気を紛らわせよう。

チャンネルを回すと、ほとんどの番組が放映されていなかった。なんでだよっ！

「それはテレビ局で働いてる人も狂ってるからじゃない？」

ああ、なるほどな。確かにそうだ。妻の言うとおり、流石はあの有名大学を首席で卒業しただけはある。いよっ、天才！

「やめてよ、おだてたって何も出ないわよ」

照れ隠しにそんなことを言いながら、妻はこたつの上のみかんの皮をむきはじめた。やはりくつろぐにはこたつにみかん。これが最高だ、英訳するとベストだ。英、訳。そういえば、日本人は英語をアメリカ人が使うものだと思う傾向にあるが、英語ってイギリス語のことだよな。アメリカなら米語になっているはずだ。

これは一体どういうことなんだ！ どうなってるんだ！ この世界は矛盾だらけではないか！ そういえばプリン体はプリンには含まれていないしっ！ なんなんだ！ 名付け親は何処にいる！ 俺が成敗してくれるわ！

「あなた、アメリカは元々未開の地だったところに、イギリス人がやって来て今みたいな感じになったのよ。つまり、歴史を大きな視

点から見れば、アメリカ語も英語で良いのよ。とは言っても、その差なんて日本での地方の方言くらいの差しかないから、英語を勉強してたらアメリカでもイギリスでも通用するけどね」

……途中からは聞いていなかったが、なるほど、つまりは英語というネーミングは正しいということか。うん。流石はザ、博識。ベスト博識人コンテストがあれば簡単に優勝できるだろう。

おっと、会話を楽しんでいる場合ではない。ここはくつろぎダイニングだ。ダイニングとは食事をする場所。つまり、一刻も早く食事をせねば。もち、もちが食いたいな。ああ、早くもち持って来てくれ。もちを待ちきれん。

「あなた、私はもちを持ってこれないわ」

何故だ？

「私にそれを言わせるつもり？あなたもうつすら気付いてるんじゃないの？」

気づく、だと。何に？

「……はあ、なら言うけど、その写真に写っているのは誰？」

誰って、お前だろう。俺が愛する妻の顔を間違えるはずがない。

「その写真は何？」

何って、写真は写真だ。

「もう、仕方がないわね。ヒントをだします。超ハッピー、言うこ

とは？」

いえいつ！

「その写真は？」

……………遺影。

「そういうこと。まさかあなた、私が死んだ日を忘れたわけじゃないわよね？」

覚えているさ、あれは俺が生きていた中で一番の悲劇だったからな。忘れるはずもない。二年前の、八月、十日、午後三時五分、十六秒頃だ。

「……………秒単位でまで覚えられているとは、流石に驚いたわ」

医者が言ってたからな。その時聞いた音も、映像も寸分変わらず覚えてる。

「そこまで思われててさぞかし私は幸せ者ね。でも、この状態、どういうことかわかってる？」

今、きっかり理解したさ。俺、狂ってるんだな。

「そういうこと。悲しい？」

いや、お前に会えるんなら、たとえそれが幻覚だとしてもさ、嬉しいよ。

「…………そう。あなたがそう言うなら、それでいいわ。人間とは、
幸せになるために生きているものだもの」

くつろぎダイニング（後書き）

こたつって良いですね。我が家にはこたつはありませんけど。

……こたつって、何？

俺は神だ

今朝、隣の家の人間はいない人間と会話をしながら散歩をしていた。この前、コンビニでは、人の死体を木刀で殴る男がいた。そして明日、本を読み、狂った。老人が、室内での首吊りをするだろう。嘆かわしいことだ。

しかし、俺だけは、この俺だけは、狂っていない。狂っていない。俺だけ。だ。

これは俺が神に選ばれた、いや、俺が神だったからにほかならない。やはりそうか、やはりな。

思えば、小さい頃から不思議に思っていた。ししし。どうして周りの人間共はあそこまで低脳なのか。ずっと疑問だったのだ。

不思議で不思議でたまらない。脳が、他の人間の脳には、脳などではなく、カニミソでも詰まってるんじゃないか？

「いや、きちんと脳が詰まっていた。俺がきちんと目視し、確認したからな」

貴様、誰だ？そもそも、ただの人間風情が神である俺になんて口のききかただ。天罰を与えてやる。

「案外、カニミソが詰まってるのはお前の脳かもな。安心しろ、お前の脳が脳でもカニミソでも、許容誤差だ。原因は、そうだな。目視による誤差、だ。これで、レポートでも完璧だな」

おいつ、雷よ、落ちろ。大地よ割れる。

「な、なんだ？う、うわ、落ちるっ！」

やはり俺は神であった。雷が落ち、大地が割れ、あのゴミが落ちていったからな。俺はついに、世界を支配できる力を手に入れたのだ。いや、元から持っていたが、気付いていなかっただけ、だろう。

「面白い、これは面白い脳だ。悪すぎる脳は、逆に価値がでるもんだな。すごいぞ、ここまで神経が繋がっていないのに、どうして生命を維持できるんだ？」

なんだ、どこにいる？何故、生きているんだ？
痛い。手に、何かが刺さった、のか？

「幻視オンリーか。痛いか、ちなみに、注射器刺さってるぞ。しかも、強力な麻酔を注入されている。可哀相に」

な、にを。

「お前、思ったより重いな。まあいい、どうせこの脳は一度見るだけだ。鮮度にはこだわらないでおこう。首、切断するか」

俺は神だ（後書き）

まあ、頭単体でもそこそこ重いけど。

読めば狂う

儂が買った。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。儂は読んだ。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。儂は狂った。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。読んで。読んで。だが、本当にこの本を読んだ。ことで、狂ったのか。あの異常が起きた。その日から、既に、狂っていた。のではないか。今ではわからない。過去でもわからない。未来では、わかった。この本を読んだ。楽しかった。嬉しかった。悲しかった。泣きた。くなつた。しかし、泣くた。めの、目がなかった。いや、あつた。あつた。のだが、儂は、近眼だ。眼鏡がなければ、目が見えぬ。身が見えぬ。ならば。泣けぬ。あた。りまえだ。無が、見えぬ。喪が見えぬ。あた。りまえ、だ。読んだ。狂った。狂った。読んだ。読まずとも。狂った。読まずとも。狂っていた。目が、抜けていた。しかし、今となつてはもうおそい。心から。思った。心から。思う。思うとは。つまり、思う。狂った。読んだから、狂った。

しかしして、儂は何をしていた？この本を読んでも、狂ってなどいないではないか。

確かにこの本は、読めば狂う者もいるかもしれぬ。しかし、それは異常に感受性の強い者に限った話であろう。儂はもう歳だ。そこまで感受性は強くない。強くなかった。

待て、異常に感受性の強い者は、異常ではないか？つまり、この本を読み、狂う者は既に狂っていた者である。つまり、この本が原因ではないのだ。

待て、異常とは、どういう意味だ？異、異なる、常、常。異なる常。つまり、常ではないということか。

常、常とは、どういう意味だ。吊す、という字が屋根のような物の下にある。つまり、室内での首吊りのことか。

よって、異常とは、室内での首吊りをしないことである。そして

異常に感受性の強い者は、室内での首吊りをしない感受性の強い者だ。

この本は、室内での首吊りをしない感受性の強い者が読むと狂うのか。

さて、それでは異常で感受性の強い者だ。異常に感受性の強い者が正しい。つまり、室内での首吊りをしないほどに感受性の強い者のことだ。

儂は、室内での首吊りをしないほどに感受性が強い、ということになるな。つまり、この本を読み、狂った。

待て、異常が起きて皆が狂った。室内での首吊りをしないことにより、皆が狂った。狂った。しかし、室内での首吊りをする者も、狂った。ではないか。よって。生きている者は、皆狂った。いや、狂っていた。いや、狂っている。

命がある者は、皆狂った。室内での首吊りをしない者は、皆狂った。ている。

では儂は、狂った。いたくない。つまり、室内での首吊りをしよう。ならば異常。ではない。正常だ。正常とは。正しく室内での首吊りをする事。だからな。この本は、正常な儂が読んだ。

儂が買った。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。儂は読んだ。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。儂は狂った。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。読んで。読んで。だが、

本当にこの本を読んだ。ことで、狂ったのか。あの異常が起きた。その日から、既に、狂っていた。のではないか。今ではわからない。過去でもわからない。未来では、わかった。この本を読んだ。楽しかった。嬉しかった。悲しかった。泣きた。くなつた。しかし、泣くた。めの、目がなかった。いや、あつた。あつた。のだが、僕は、近眼だ。眼鏡がなければ、目が見えぬ。身が見えぬ。ならば。泣けぬ。あた。りまえた。無が、見えぬ。喪が見えぬ。あた。

読めば狂う（後書き）

正常だからって、室内での首吊りなんてしないでくださいね。

もう限界だ（前書き）

誰にだって、我慢の限界はありますよね。

仕方が無いですよ。我慢のしすぎは体に悪いですし、何より脳が可哀相です。

もう限界だ

もう限界だ！我慢できない。もう私は、我慢をやめる。

まずはコンビニに行こう。いつもいつも思っていたんだ。弁当を買うとき、いつもいつも「温めますか？」とか聞きやがって。

「いえ、いいです」と、毎回毎回答えているというのに、何故学習しないんだ。私に対する嫌がらせだな？

今日こそ、今日こそは、「はい、お願いします」と言ってみよう。

あの店員が、驚き、絶望に染まっていく様子が浮かんでくるわ。

「……………」

店員は、死んでいた。

いつもいつも「温めますか？」と聞いてきた店員。私の具合が悪いつき、「大丈夫ですか？」と聞いてきた店員。私が小さい頃からいつも笑顔でレジを打っていた、店員。高い位置の商品を取ろうと頑張っていた私に、手を差し延べてくれた、店員。

涙を拭い、次の目標を探す。そうだ、ボーリング場を標的にしよう。

いつもいつも私が「三ゲームで」って言ったら、「三ゲームですか、それなら、会員になっていただいた方が安くなります。入会費は三百円ですが、それで五百円割引になりますので、二百円程お得になります」とか、長ったらしく説明してきやがった、店員め。

今日こそ、今日こそは会員になってやる。店員の驚き、絶望に染まっていく様子が目に浮かぶわ。

「……………」

店員は、死んでいた。思い出を思い返してみたが、それほどエピソード

ソードはなかった。ただ、私がストライクをだしたとき、笑顔で拍手してくれたっけ。

涙を拭い、次の目標を探す。そうだ、あの遊園地に行こう。いつもいつも「大人一名ですね？」とか聞いてきやがって。見れば分かるだろう。悪かったな、一人で。

今日こそは、「二名です。大人二名です」と言ってやる。一人だけど。

「……………」

店員は、死んでいた。

思い出も無い、店員。正直、いつもいつもと言いつつ、一回しか来たことなかったし。でも、私が迷子になったとき、出口まで案内してくれたっけ。

涙を拭い、次の目標を探す。っとその前に。

誰もいない遊園地。勝手に入ってもばれないだろうし、入ってみよう。

流石にジェットコースターは動いてないだろうけど、お化け屋敷とかは探検してみたら面白そうだし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6482y/>

パラパラ

2011年11月24日19時55分発行